

時の旅人

歴史の舞台へ人を誘う
第②章

ふたりのルイス

ルイス・デ・アルメイダとルイス・フロイスの道

今からおよそ四百年前、日本で生涯を遂げたポルトガル人に、ふたりのルイスがいた。彼らは、日本にキリスト教を伝えたフランシスコ・ザビエルの遺志を受け継ぎ、それぞれの使命感に燃え、長崎県内に多くの足跡を残している。

ルイス・デ・アルメイダ

アルメイダは一五五二年、平戸に上陸した。才能とエネルギーにあふれ、その人生には貿易商人、外科医、修道士、司祭と多彩な姿があった。彼は私財を投じ、西洋医学を導入した日本初の病院を豊後府内（現大分市）につくったことで知られているが、彼ほど長崎県内を一番多く訪ねた宣教師はいないかもしれない。平戸、横瀬浦（現西海市）、口之津、島原、五島、大村、長崎など至る所に足を運んだ。一五六六年には五島の領主宇久氏を治療し、翌年は大村純忠の家臣長崎甚左衛門の招きにより長崎で最初の布教を行った。このことが、長崎開港への道を開くきっかけとなった。

彼は南蛮船来航のための良港を探だけでなく、医療活動によって病気を治し、修道士として人々の心も癒した。貿易で莫大な富を得ながらも、すべてを投げ打って、日本における布教と福祉の道を選んだアルメイダは、天草でその生涯を閉じた。



アルメイダの五島布教記念碑（五島市）

ルイス・フロイス

フロイスは、一五六三年、横瀬浦に上陸した。語学と文才に優れていた彼は、布教の様子をローマに書き送り、日本のできごとや文化の違いを、その著書「日本史」や「日欧文化比較論」の中に記した。布教の歴史はもちろん、信長や秀吉、衣食住のことが生き生きと描かれ、当時の日本を伝え知る貴重な資料となっている。

彼が「日本史」の執筆を始めたのは口之津だったといわれ、また、ローマへの最後の報告は、一五九七年に起こった長崎西坂での二十六人の殉教についてであった。

この殉教は、彼の記録によってヨーロッパでよく知られるところとなり、日本ではまだ迫害が続いていた一八六二年、二十六人は聖人に列せられた。フロイスは、外国人宣教師の視点から、日本キリシタンの栄光と悲劇の道のりを描き、今に伝えられた人である。二十六人の殉教から五カ月後、長崎で没した。

ふたりのルイスのほかにも、
多くの外国人宣教師たちが日本での布教に
熱い思いを抱き、長崎県内の各地を巡り歩いた。



ルイス・フロイス像（西海市）